

2021
秀作

第19回「金融と経済を考える」高校生小論文コンクール

小一から高三 震災十年

東京都・中央大学高等学校 3年 小野 諒介

2011年3月11日、風邪をひき学校を休んでいた私は当時、小学校生活によくやく慣れ進級を間近に控えた小学1年生でした。その日の午後は体調も安定し、少し遅めのお昼は消化に良いようにと温かいうどん。それを平らげリビングで少しまどろんでいたはずなのですが、突然の大きな揺れで目はいやでも覚めました。長い、長い、経験したことのないような大きな揺れ。姿見は倒れ、食器は棚から落ち、うさぎの貯金箱は割れました。私の家はマンションの上層階であったものの埼玉県でしたから、震源が東北と見たときは驚きました。当時、旅好きな父の影響もあり地理に関しては明るかったのですが、東北というと、とても遠い所というイメージでした。

これほどまでに詳細に、生々しく、当時の情景を描写できてしまうのはあの体験が大きなトラウマであることの裏返しと断言していいでしょう。また私たちの間ではしばしば、あのときどこで何をしていたかという話がされます。中学でも高校でも、教室の何が落下したのだ、先生の怒号が怖かったのだ、入学式や校外学習など、同じような時期にあったこととは比にならない情報量なのです。

「戦後70年が経過し、風化が懸念されています——」「この教訓を後世に伝えるべきです。決して風化させてはいけません——」このような、「〇〇から何年」というニュースが流れるたび、どこか他人事のような気がしていました。しかしふと気が付いたのです。私たちはあの日を知る最後の世代なのだ。今の中学生は当時小学校に入っておらず、小学生に至っては生まれていない子もいることを認識した上で日本のこれからを考えたとき、私たちがやらねばならないことがあるのではないかと思います。その中でも私は、エネルギー問題と真正面から向き合うことが重要だと考えます。なぜなら、私たちは日本のこれからを担っていくのですから。

地震の後にやってきた大津波によって起こった福島第一原子力発電所の事故。日本のみならず世界にも大きな影響を与えたこの出来事は、その後のエネルギー論争における転換点だったと言えるでしょう。文明社会の土台となる電力をどのように確保するか。この議論は産業革命期より連続して行われていますが、各時代においてそれと並行して出てくる課題は異なります。最初はいかに効率よく生産するかを目指していたのが、1972年には「ローマ・クラブ」によって発表された『成長の限界』などにより資源の枯渇が問題視されはじめ、その後は1992年に地球サミットが開催されるなど、地球温暖化対策の動きが広まってきました¹⁾。そうした議論の中で注目を浴びたのが原発、温室効果ガスを排出しない、この論争に終止符を打ついわば救世主のような存在と捉えられます。こうした経緯を一切知らず、ただ悪者として扱われてきた姿しか見ていなかった私は当時、不思議でした。震災から数年後、国道六号線が全通した際に原発周辺地域を訪れたのですが、本当に「言葉が出なかった」のです。崩れた家屋にほぼ手つかず状態の駅前商店街、真っ暗なコンビニ。至る所に雑草が生い茂り、バリケードが設置されていたことも強く憶えています。人が住まないとこれだけ静かで、空っぽという表現がしっくりきてしまう、そんな光景を実際に見ると、なぜあんな危険なものを作ってしまったのかと、不思議でなりませんでした。

「原子力 明るい未来の エネルギー」

それだけに、この看板の破壊力は凄まじかったのです。なぜなら、今見えている光景と正反対のことを高らかに掲げていたのですから。

私たちは、この看板をはじめとした原発を建設するまでの歴史も知るべきであると思います²⁾³⁾。当時の人々の決断をただ批判するのではなく、そこに至る経緯や人々の気持ちが向いていた方向は何だったのかを冷静に考察していくのです。エネルギー政策を決めるのは議会、つまり結局は私たち国民が決めていくものだということをしっかりと認識するべきでしょう。教科書や資料集でも多くのページを割かれているのは廃炉作業や今後のエネルギーについてばかりです。勿論^{もちろん}それらは大切ですが、その前段階を知らなくて本当によいのでしょうか。再生可能エネルギーが今の議論の中心ですが、当然それらにも長所と短所が存在するわけで、どうしても長所ばかりを見てしまっていないかと不安になります。

長所を強調し、口巧みに嘸^{はや}し立てるのはいつか失敗するとわかっていれば、それで済む話です。私たちは歴史から学ぶことができます。「歴史は繰り返す」という言葉は教訓の継承が上手くいけばいずれ死語と化すでしょう。

お金の問題も、エネルギー政策と切っても切れない関係だと考えます。太陽光発電は、家の屋上に設置するような小規模なものから、もともとは田畑だった場所一面に設置する大規模のものまで様々です。実際、少し地方へ足を延ばすとパネルはあらゆる場所で見かけることができます。これらは2011年に成立した再生可能エネルギー特別措置法により売電ビジネスが定着している証ですが、一点留意しなければならないのは、あくまでもビジネスであるということです。利益を追求するあまり、競争が白熱するあまり、公益を害する可能性を持ち合わせていることをわかっておくべきということです。風力発電の騒音被害や太陽光であれば反射光なども既に課題となっていますし、その他にも建設地周辺の生態系へ及ぼす影響も考慮しなくてはなりません⁴⁾。「地球温暖化の抑制」という人類共通かつ最大の目標を成し遂げるために、その大義名分だけに踊らされてはならないという意識は、今後の日本を背負う私たちが必ず持ち合わせておかねばなりません。

今後の日本、という再生可能エネルギーについて調べていくうちに明るい話題を見つけました。蓄電技術です。風力や太陽光などの再生可能エネルギーは安定供給が難しいことは一般によく知られていますが、作った電力をためておければ送電網へ好きな量を好きなときに送ることが可能です。つまり、再生可能エネルギーの更なる市場参入の鍵と言ってもよいでしょう。この電池・蓄電技術の特許出願件数が日本企業に多く、世界の先駆けとなっていることを大変誇らしく思います⁵⁾。また日本が誇る自動車産業も、今後十数年でガソリン車から電気自動車へ変革を遂げるのか、注視していきたいです。

ここまで震災から原発事故、エネルギー問題について私の考えを述べてきましたが、このように考えを深めるようになったのは間違いなく小一という段階で震災を経験し、そして被災地を実際にこの目で見たからだと確信しています。先述したような悲惨な光景も見ましたが、力強く復興へ進む姿もはっきりと見てきました。仮設商店街は活気づいていましたし、帰路の福島県国見で立ち寄って買った桃は大変美味でした。細切れだった JR 常磐線はバス代行を経て時刻

表から灰色が消え、品川駅のホームに仙台行きの列車を見たときは少し感動してしまいました。私の心の中には、震災直後に父が言った「もう常磐線は厳しかもしれない」という言葉が残っていましたが、先が全く見えない状況から、わずか10年で、たった10年でここまで来たのかと思うと……。しかしまだ終わってはいません。今も原発廃炉に従事されている方、除染作業をされている方、震災前の姿に戻そうと努力されている方、多くの方々が地域のために尽くされていることを忘れてはなりません。人々の熱意が、苦しみや哀しみを乗り越えたから、ここまでやれたのですから、今度は私たちの出番なのではないでしょうか。あの日を記憶する最後の世代として、まずは知ることから始め、実際に足を運ぶことを強く訴えます。今も残る生々しい津波の痕、人々の温かさ、復興までの軌跡。そこで見ることでしかわからないことは絶対にあります。それは私のこの文章で証明できているでしょう。知り、見て、そして考える。学ぶとは教室で行われることが全てではありません。文字や写真でわかったつもりになるのではなく、もう一度あの日の過去と現在と真正面でぶつかってみませんか。

(注)

- 1) 『政治・経済資料2021』 東京法令出版 2021年2月
- 2) 日本経済新聞「いつか正の遺産に」原子力PR看板、標語考案の男性
URL <https://www.nikkei.com/article/DGXZQOFB09C5K0Z00C21A3000000/>
閲覧日 2021年6月27日
- 3) ハフポスト「原子力 明るい未来のエネルギー」双葉町原発看板を撤去
URL https://www.huffingtonpost.jp/2015/12/21/futaba-kanban_n_8851938.html
閲覧日 2021年6月29日
- 4) 小澤祥司『エネルギーを選びなおす』 岩波新書 2013年10月
- 5) 経済産業省 資源エネルギー庁『「知財」で見る、世界の脱炭素技術（前編）』
URL https://www.enecho.meti.go.jp/about/special/johoteikyoo/chizai_01.html
閲覧日 2021年9月18日

〈参考文献〉

- 芥田知至『エネルギーを読む』 日本経済新聞出版社 2009年12月
本間龍『原発プロパガンダ』 岩波書店 2016年4月
井田徹治『データで検証 地球の資源』 講談社 2011年12月
佐藤仁『「持たざる国」の資源論』 東京大学出版会 2011年6月
協阪紀行『欧州のエネルギーシフト』 岩波書店 2012年6月